

## 編集後記

本年は『日本外交文書』の第一巻が刊行されてから八〇年目にあたります。この節目の年を記念して、本号では『日本外交文書』八〇年』と題した特集を組み、杉山晋輔外務事務次官の巻頭言を掲載するとともに、三谷太一郎東京大学名誉教授、五百旗頭真熊本県立大学理事長、臼井勝美筑波大学名誉教授、波多野澄雄『日本外交文書』編纂委員長に、それぞれコメントをご寄稿いただきました。

併せて、昨年度刊行した『日本外交文書 昭和期Ⅲ 関係調書集』の概要、これまでに刊行した『日本外交文書』二一八冊を一覧にしてお示しするとともに、『日本外交文書』の編纂にご尽力いただいたてきた、歴代編纂委員長・委員をご紹介させていただきました。

さらに本号では、平成二八年三月一日に外交史料館講堂で行われた福永文夫獨協大学教授による講演会の記録「占領と戦後日本―GHQ文書と外務省文書から―」を掲載しています。本講演会では、占領期の日本において、占領した者とされた者の相互作用の中で、どのようにして占領政策が実行され、戦後日本の形成に関わる様々な法制度、行政制度ができたかといったのかお話しいただきました。

また、黒沢文貴編纂委員による論文「明治末・大正初期の日露関係―敵か味方か、はたまた「友」か?―」では、日露戦争後における日本の東アジアにおける地政学的位置関係および戦略的關係の変化が日露関係にどのような影響を与えたのかにつき多角的に考察しています。

史料紹介としては、原口邦紘編纂委員が「高田利貞『奄美群島ノ戦後処理ニ就テ』」と題し、奄美群島の戦後処理に奄美守備隊長として携わった高田利貞・元陸軍少将の手記（一九四五年八月九月）を紹介しています。また、編纂室による「外交史料館所蔵史料に見るドイツ戦後賠償の形成過程―現物賠償、戦争賠償、ナチスの不法に対する補

償―では、外交史料館が所蔵する第二次世界大戦後のドイツの戦後賠償に関する文書を紹介し、その形成過程について分析を行っています。

さらに、神山晃令編纂委員が「重光外務大臣の『東西のかけ橋』演説草案」芳澤直之職員が「昭和戦前期における宮内省御用掛と外交官」と題した研究ノートをそれぞれ寄稿しています。

このほか、日向玲理事務官執筆による平成二八年七月七日から二二月二七日まで開催された特別展示「幕末へのいざない」の紹介記事や、『外交史料館報』総目次（第二一―三〇号）も掲載しています。

さて、『外交史料館報』も第三〇号という節目を迎えました。あらためて、これまでご協力いただいた各位に厚く御礼申し上げますとともに、益々のご支援を心よりお願い申し上げます。

〈掲載論文などの論旨は、執筆者個人の見解であって、外務省の公式見解ではありません。また、過去に使用された一部用語を歴史的用法としてそのまま使用しています。〉

### 外交史料館報 第三十号

平成二十九年三月二十四日

編集発行 外務省外交史料館

東京都港区麻布台一―五―三

電話 〇三―三五八五―四五二一

印刷 東京都大田福祉工場

東京都大田区大森西二―二二―二六